

彼と彼女の大事なもの

— 『オセロー』における“taint”を含む台詞についての小論考—

松 浦 雄 二
(総合文化学科)

All You Need is Love?: an Interpretation on the Lines
Including the Word “taint” in *Othello*

Yuji MATSUURA

キーワード：シェイクスピア、任命権者、評価、名誉、愛
Shakespeare, power, estimation, honour, love

1. はじめに

シェイクスピアの『オセロー』においては、劇中に二箇所、“taint”という語が使用されている¹⁾。この語を含む二箇所の台詞では、オセローとデズデモナそれぞれにとっての「汚してはならないもの」への言及がなされている。この台詞は『オセロー』という劇世界を収斂する劇的事実であり、終局の悲惨な結末へと連なる悲劇の温床とも言えるものが暗示されているとも言える。小論では、舞台『オセロー』に描かれるヴェニス社会、軍人の世界、女性の世界の様相を検証しながら、それらの様相が“taint”を含んだ二箇所の台詞にいかにか収斂し得るか、これらの台詞を孕みつつ劇がいかにか展開しているのか、悲劇の温床が『オセロー』の中でいかにか設定されているのかについて、考察を試みてみたい。

2. 舞台『オセロー』の世界

『オセロー』の舞台世界は、ヴェニス共和国という白人キリスト教徒の社会である。ヴェニス大公ら

による1幕3場の軍議の場面は、ヴェニス大公が軍事統率権を持つとともに、オセローと娘の秘密結婚に関するブラバンショーの訴訟騒ぎを裁量できる裁判権をも持ち、社会における権力と影響力が絶対であることを、具体的に示している。彼は、ヴェニス社会に君臨する最高権力者であることが示されるのである。

今、仮に、大公を頂点としたヴェニスの支配機構に影響力を及ぼす人々を、ヴェニス社会=白人キリスト教社会の「中心(にいる人々)」と呼び、その「中心」から遠ざかり「権力」や「権限」とも遠ざかっていく人々を「周辺(の人々)」、概念的に最も「中心」から遠ざかった位置にある人々を「周縁(の人々)」と呼んでおくと、『オセロー』における中心-周縁の関係は、たとえば中心に置かれているものから周辺を抜け周縁に向かって外れていくという順序でいけば、白人中心の社会における白人-有色人種、男性中心社会における男性-女性、キリスト教徒-異教徒、と、すぐに思い浮かぶ。男性の世界だけみる

と、ヴェニス共和国という世界では、ヒエラルキーのトップにいる大公を中心に「国家を代表し国事に参与される元老議員諸卿、敬愛おくあたわざるご一同」(小田島雄志訳)²⁾が続き、それにかしづき従う者たち、すなわち「周辺」が続く、というかたちである。

オセローたち軍人の世界は、ヴェニス社会全体では周辺であるが、軍人の世界そのものも上と同様のかしづきの中に上官と部下というかたちで位置づけられる。中心と周縁を結ぶ直線的な軌道を想定すると、オセローたち軍人は、自分が挙げた功績によって、その軌道上の中心に近い方位に位置するか、周縁に近い方位に位置するかが定まる。もちろんここで注意すべきは、オセローの出自である。異邦人であるオセローは、本来的には、ヴェニス共和国という白人キリスト教社会に存在せず、従って周縁どころか、その埒外にある。オセローは、ただ彼の軍事的功績によって中心にいる人々に認められてのみ、ヴェニス社会の中心に近い周辺、要人として位置することができる存在であり、ヴェニスという地域に白人に生まれてキリスト教の洗礼を受けただけで、一市民としてともかく社会の枠組みの中に無条件に取り入れられることができる人々とは、一線を画された存在である。その意味ではオセローは、軍人としての存在意義を失えば、所属を望んでいる世界の埒外に飛ばされる危うさと常に隣り合わせである。

一方、女性の中だけにも中心-周縁の関係がある。中心から周縁に向かう軌道上に、デズデモーナ、エミリア、そして娼婦であるビアンカの順に続く。この女性たちの世界は、男性中心の世界では周縁に追いやられるものだが、白人でキリスト教徒である。つまりそれは、男性が持っている様々に有利な条件や権益などについて、女性が意識し所有の権利を主張しなければ、あるいは侵さなければ、ヴェニス共和国という社会の中の位置づけにあっては安定的に存在できる、ということである。ただ、ビアンカは少し違う位置づけになるが、それは後に言及したい。

3. 任命権者と評価と存在理由

『オセロー』という芝居の中では、ヴェニス共和

国の中心にいる人々は、概ね社会的地位を持っていて、概ねその地位に伴う命令権や任命権などの権力も持っている白人男性キリスト教徒として登場する。また、そのような人々は、地位や権限という、社会の運用システムの中にきちんと組み込まれている社会統治装置を所有しているだけではないようにも見える。例えばそれは、オセローの最初の方の台詞の中にも滲み出ている。オセローがヴェニス共和国の公人としてヴェニス大公の前に初めて出て来る時に「お歴々」に対して呼びかける言葉は、そのことを物語るように見える。

OTHELLO

Most potent, grave, and reverend signors,

My very noble and approved good masters, . . .

(1.3.77-78)³⁾

この「いかにも勿体ぶった呼び掛け」⁴⁾は、オセローがこれから行う一連の自分の物語への序奏であり、またその物語の内容の伴奏としても響くであろう。現実の生活の中で用いられるこういう、'potent, grave, and reverend'と言ったような言葉遣いは、ただのお決まりの定冠詞程度に使われる場合もあれば、ただの「おべんちゃら」として使われる場合もあるかもしれない。が、劇が進むにつれ、一連のオセローの語りには或る態度があったのだと感じ取ることができるであろう。彼がくどいぐらいに用いるこれら人間の立派さを表わす形容詞に、儀礼的な響きを、というより寧ろ言葉通り誠実に気持ちを込めて使おうとしているような態度である。

イアーゴーに簡単に騙されてしまう、「大らかで真っ直ぐな」(松岡和子訳)オセローの言葉遣いは、言葉は大仰だが良い意味でも悪い意味でもオセローという人間の単純さを感じさせる。「中心」の人間には、その地位・権限に伴う名声があり、あるいは、他者から尊敬も敬愛も受けるような、人望を得ることができるような人間性がある——「正直な」オセローの台詞には、そのような言説的な「中心」の人間像を、イアーゴーに騙されるのと同じぐらい単純に肯定していることが、劇の進行に従ってほの

めかされていくように思われる。そういう言説における善き人間性は、個々人の実態としては本来的には地位・権限の絶対的的属性ではあり得ず、基本的には別問題の、違う次元の話であるが、オセローの大仰な言葉遣いは、地位・権力と人間性が相調和することを彼が前景化しているように感じさせるのである——ちょうど外見は内面に調和しているものと信じ込むのと同様に。それはあくまで上の形容詞の言葉遣いの、オセローにおける側面であって、普遍的真理ではないことを観客は感じるであろう。オセローと、上の台詞でオセローが呼びかけたヴェニスの要人たちとの1幕3場におけるやり取りは、お互いの人間性をえぐり合うような、人間性の深い所がわかるような、そこまでのやり取りとしては描かれていない。ここでは、地位・権限を持つ人がその属性として善き人間性をも持つという前提・言説を承認する、自身善き人であるオセローの言葉遣いがあるのである。もちろんこのような態度は、オセローにとって「お歴々」が、自分のヴェニス社会での存在理由を左右する権限を持つ任命権者であることと表裏一体である。このオセローの、言説の承認の仕方、オセローがヴェニスという白人キリスト教社会で生きていくスタンスというものがまず、現われされている。オセローを軍事作戦の総責任者と認めて任命できる権限を持ったこれらの人々がオセローの軍事的功績の大きさと意義を認めること、その任命権をオセローのために行使すること、すなわち彼らのオセローへの「評価」(“estimation”)⁵⁾が、有色異邦人オセローのヴェニス社会における存在意義を生成しているのである。

任命権者によって軍事作戦推進権を与えられた者でも、例えば(イアーゴーのように)「任命されて当たり前」と思う者もあるかもしれない。が、劇のそここでオセローの人となりの立派さが伝えられている観客は、先の引用の仰々しさが、ヴェニス社会に評価され得る「高潔さ」とも結びつくものだと感じていくであろう⁶⁾。主人公にとって、またキャッシュ、イアーゴーにとって、任命権者のestimationとは、ヴェニス社会における自らの存在意義と抜きがたく結びついており、評価に伴う‘reputation’「評

価、評判、名声」という言葉とも、当然、緊密な関係を持っている。イアーゴーの計略にまんまと乗せられ、酔って不祥事を起こしたキャッシュが繰り返し叫ぶ“reputation!”(2.3.258ff.)の言葉は、劇中の軍人の世界では、中央一周縁をめぐる闘ぎ合いにおいて「評価」がいかに本質的に重要で致命的であるかを物語るものである。軍人の闘ぎ合いの世界における任命権者はオセローであるが、その権限と評価の関係を一番よく身に染みて知っているのはイアーゴーであり、後でも触れるが、評価されないことで起こる男の‘jealousy’の毒を劇中に振り撒く。自身がその毒に犯されて、彼は、上官であるオセロー、キャッシュより一段上の認識力を悪魔のように駆使して、謀略の限りを尽くすのである。

4. 闘ぎ合うもの、合わないもの

話をヴェニス共和国に戻せば、ヴェニス共和国というのは、白人かつ男性が権力を握って国政を運営する、キリスト教徒が中心の世界である。であるから、先に述べた、白人と有色人種、男性と女性、キリスト教徒と異教徒という中心一周縁の関係が三重に重なっている世界である。この世界の中で主だった人々は、白人男性キリスト教徒であることに加え、中心にいるための権能を握っているのも、その中心に座して動く必要がない。軍人の世界におけるような、周縁から中心を目指しての競争・闘ぎ合いが無い。それから、女性たちも、基本的に、中心に座して自ら動く必要はない。デズデモーナは、オセローと結婚することによって、白人社会の周縁をも超えた、白人キリスト教社会の枠外に追い出されるかのようだが、オセローがヴェニス共和国に貢献する存在である限り、白人キリスト教社会の中の中心的地位・地位を外れることは無く、その社会の中に留まる。また、デズデモーナの父ブラバンショーは、皆の前で、しかも筋道の通ったことを理解し許容できる父親として、一度悪魔呼ばわりしたオセローを娘の夫として公認する。大公と肩を並べる権勢を持っている政治家として描かれているブラバンショーからも結婚を許されたお墨付きをもらったことで、オセローは白人キリスト教社会の枠そのものからは

じき出されることなく、中心一周縁の軌道上に安定的に留まり、社会の成員、しかもVIPとしての扱いを受ける。そうすると、オセローの妻となったデズデモーナも、オセローの功績とともにナンバーツーぐらいの有力者の父の許可がある限り、白人キリスト教社会での位置づけは結婚前とほぼ同じとみなしてよいであろう。先に述べたように、男の権利を侵害することさえなければ、デズデモーナは白人キリスト教社会の中で中心に近いももとの位置にいることが可能になるのである。この場合、デズデモーナも座して動く必要がない。デズデモーナは上の考えでいけば白人キリスト教男性社会の中で安泰であって、動く理由がない。デズデモーナの侍女であるエミリアも、デズデモーナに仕えている限りは、自らの位置づけから脱するという行動は取らない。娼婦のビアンカについては、この二人の女性とやや違い、ヴェニス社会には留まることができのけれども、周縁に位置づけられている。男性の身勝手なセクシュアリティに利用されて欲望解消のための装置として日常生活のレヴェルから外され、男性中心の社会の末端に置かれ、この位置づけからはや動きようがない存在として描かれる。ビアンカは、イアゴによって人殺しの濡れ衣を着せられそうになった時、イアゴの妻エミリアによって呪詛を投げつけられる。

EMILIA

O fie upon thee, strumpet!

BIANCA

I am no strumpet

But of life as honest as you, that thus

Abuse me.

EMILIA

As I? Foh, fie upon thee!

(5.1.121-23)

自分はあなたと同じぐらいまっとうに暮らしている人間だと必死で主張するビアンカに対し、唾を吐きかけ私たちはお前と違うといわんばかりに手前で一線を引こうとするエミリアは、ビアンカが男性中心社会の男のセクシュアリティの欺瞞を隠蔽する装置として周縁に追いやられ忌み嫌われていることなど

は思いも及ばず、自分の属する男性社会を強化している。

5. 女性たちの世界

このように、女性たちは皆、ヴェニス社会で固定的な位置づけを与えられて、鬩ぎ合わない。というよりむしろ、女性の世界におけるもっと重要な女性たちの共通点は、男性の鬩ぎ合いとは違う地平にあって、誰かを一途に愛して**いぶれない**ことにある。ビアンカが娼婦であるという情報を、最初に口にするのはイアゴであるが (A huswife that by selling her desires / Buys herself bread and cloth, 4.1.93-4)、その情報が無ければ、ビアンカはただ愚かなぐらいキャッシュを愛している女に過ぎない。エミリアは、オセローがデズデモーナへの不義の疑いを確信に変えることになった例のハンカチを、夫のために盗む。彼女は「夫の気まぐれを叶えてやるだけだ」と言ってデズデモーナが落としたハンカチを持ち去るが、デズデモーナにとって大事なものと分かっているコソ泥と同じことをしてしまうのは、これもまた、ただ夫に気に入られたいがための愚かな「愛」と言うべきである。

エミリアは、男性中心社会の中での女性の位置づけに特に抗わず、自分の立ち位置に基本的に甘んじているが、男性中心の社会では、こういう女性は分をわきまえていると言われるであろう。わきまえずに、男性優位の社会で男性に混じって「鬩ぎ合う」という行動を取れば、それは男性社会の社会的中心一周縁関係において「中心に向かう」ということを意味する。だから女性がわきまえるべき「立ち位置」を意識することなく、しかも自ら進んで鬩ぎ合いに参加すれば、概ね鬩ぎ合いに食い込まれることを拒んで自分の立ち位置を守ろうとする男たちから何らかのかたちで「攻撃」を受けるはずである。現代に生きるわたしたちがどの程度男性優位の社会に生きているかということは、社会の女性に対する態度や女性の働く状況などから伺い知れるところである。

話をエミリアに即して、エミリア自身の立ち位置の取り方を見てみると、例えば次のような台詞がある。

DESDEMONA

Wouldst thou do such a deed for all the world?

EMILIA

Why, would not you?

DESDEMONA No, by this heavenly light!

EMILIA

Nor I neither, by this heavenly light:

I might do't as well i'th'dark.

DESDEMONA

Wouldst thou do such a deed for all the world?

EMILIA

The world's a huge thing: It is a great price

For a small vice.

DESDEMONA Good troth, I think thou wouldst not.

EMILIA By my troth, I think I should, and undo't when I had done. Marry, I would not do such a thing for a joint- ring, nor for measures of lawn, nor for gowns, petticoats, nor caps, nor any petty exhibition. But for all the whole world? 'ud's pity, who would not make her husband a cuckold to make him a monarch? I should venture purgatory for't

(4.3.63-76)

デズデモーナが、この世のすべてと引き換えならそんなことをするのか、つまり「夫以外の男と寝るのか」という、一般的な、誇張的な響きを持つ訊き方で問うたのに対し、エミリアは、つまらない贈り物などではやらないが、「夫を王国の王とするためには」というふうに、ことさらに「この世のすべてのため」というところを「夫のため」と意図的にずらして変えて、答えている。エミリアのこの答え方に、エミリアが自分のこの世の中での立ち位置を自覚しながら分を「わきまえる」そのわきまえ方が、示されている。夫に王国を手に入れさせるためならば、不義の一つや二つ安いものだというエミリアの発想は、エミリアがイアーゴーを愛していることによると言える、というか、エミリアはそのように描かれている。

デズデモーナはどうか。デズデモーナは、言うま

でもなく、オセローを愛している。4幕2場で、オセローからいきなり打擲を受け、すぐあとに続いて身に覚えのない不義について問い詰められたあと、空々しく相談にのったイアーゴーに対して、彼女は次のように答える。

(DESDEMONA)

If e're my will did trespass 'gainst his love

Either in discourse of thought or actual deed,

Or that mine eyes, mine ears, or any sense

Delighted them in any other form,

Or that I do not yet, and ever did,

And ever will——though he do shake me off

To beggarly divorcement——love him dearly,

Comfort forswear me! Unkindness may do
much,

And his unkindness may defeat my life

But never taint my love.

(4.2.154-63、下線は筆者による)

心の中の思いにおいても実際の行動においても、自分はオセローの愛を裏切ったことはない、自分の五感をオセロー以外の男で楽しませたことはない、これまでも今もこれからも愛していなかったら神の恵みはいらない、あの人が冷たくしても、私の愛は変わらない、、、デズデモーナはひざまづいて誓いを立てる（最終行下線部の“taint”には、後ほど触れる）。このように、女性たちは愛するということにおいてとても一途である。

6. 男たちの闘ぎ合いと評価

他方、軍人の世界には、イアーゴーの抱えるどす黒く執念深い jealousy を通して、我々自身もまた苦みと藪味に満ち満ちた闘ぎ合いの存在を感じ取ることが出来る。本来白人キリスト教社会の枠組みの外からやってきた異邦人でありながら、オセローは、その軍人としての力量だけで、この白人社会の枠組みの中に自分を位置づけることができる。オセローが白人キリスト教社会の中に自分の場所を見つけているのは、その類まれな軍事上の成功から得た任命

権者からの評価によってである。女たちの世界と異なり、軍人の世界の中では、中心一周縁の位置づけには、流動可能性がある。何かの位置での定着は評価がある場合によって決まる。この世界では位置づけの決定因子は評価なのであり、位置づけにこだわる男たちの言動は、つねに評価を巡る。

「戦術ではなく算術の大先生」(松岡訳)と呼ばれる、戦さを知らないキャシオーが、自分を飛び越して昇進してオセローの片腕となった——このことに關してやるかたない憤懣を、イアーゴーは劇の冒頭でロダリーゴーにぶつける。劇はそのようにして始まるのである。オセローが周囲から受けている軍人としての評価は抜きん出ており、それに対してはイアーゴーも認めるところである。が、イアーゴーにとって自己評価では自分が勝るキャシオーの方をオセローが評価したという一点で、キャシオーに対する妬み嫉み恨みがオセローにも転嫁されていく。イアーゴーのこの怨念はそれ自体が一人歩きをするかのような激しい恐ろしさがあるが、妬み嫉み恨みも jealousに通ずるならば、紛れもなくこの激しいイアーゴーの jealousy が致命的な毒としてオセローを侵すことは間違いない。この芝居は、イアーゴーが、他の登場人物より状況が見えている、一段高い認識の場所に居ることを利用して、イアーゴーが全てのことを推し進めているかのように見える。しかし、オセローに「嫉妬に注意なさい」と忠告するイアーゴー自身もまた、この毒に深く侵されていることを、自覚することはできない。シェイクスピアが、芝居『オセロー』という鏡を掲げて映そうとしたこの世界での一番恐ろしいことの一つは、その点にもあるだろう。

話を少しもとに戻せば、軍人として評価を受けることは、それに見合った honour、reputation を受けることであり、従ってオセローやキャシオーにとって reputation や honour は「評価」と表裏一体であり、彼らはどうしても reputation を重んじなければならないだろう。イアーゴーにとってはどうであろうか。

先ほど触れた冒頭の場面は、もともとロダリーゴーがイアーゴーに不満を訴えようとするのを、なだめるとみせかけてその何倍もの不平不満をロダ

リーゴー相手にまくしたてるという、ちょっとユーモラスな場面でもあるが、この冒頭で、イアーゴーは、人前と一人の時とで言うことが違うのは当たり前、自分が一番、誰かに仕えるのは忠義のためでなく自分が良い目を見るため、自分は見かけの自分とは違うということを観客に強烈にアピールする。この強烈さは、イアーゴーもまた、reputation や honour が喉から手が出るほど欲しいことへの裏返しでもある。だが、そのような reputation や honour の実質について言えば、イアーゴーにとってそれらは有難味のない評価の連れ子のようなものである。その、'reputation' や 'honour' の実質に対する態度の違いが、イアーゴーがオセローに付け込むことができる余地を与えるのである。つまり、「実質」などというものに価値を置かないイアーゴーが、「実質」を重んじているかのように見て実態は「実質」の姿を見誤って勘違いしているオセローに、付け込むことができる余地を与えるのである。存分に付け込まれた主人公は、イアーゴーの人となりを見抜く眼力においても、そしてデズデモーナへの愛においても、自分の honour の拠って来たる所、honour の実質たる、まごうかたなき honesty が、実は自分に全く欠けていたことを、終局において「この程度の honesty'なのに、本物の 'honour' を受けるにふさわしい実質も持たないのに、名が残るはずが無い」("why should honour outlive honesty?" (5.1.245)) と、絶望的に悟らねばならないのである⁷⁾。

1幕3場、居並ぶお歴々の前で、戦場にデズデモーナを伴いたいと述べながら、オセローは大見得を切る。

OTHELLO

... No, when light-winged toys
Of feathered Cupid seel with wanton dullness
My speculative and officed instrument,
That my disports corrupt and taint my business,
Let housewives make a skillet of my helm
And all indign and base adversities
Make head against my estimation.

(1.3.269-75、下線は筆者による)

この台詞はまた、Othelloのかの名台詞を思い出させる。

Keep up your bright swords, for the dew will
rust
them.

(1.2.59、下線は筆者による)

この二つの引用にある下線部のうち、“helm”「兜」と“swords”「剣」は、オセローにとって、自分への「評価」を高からしめた武功の象徴である。「剣をぬいてどうする」と、冷静に分別を働かせることを促す二つ目の引用の名台詞はまた、一級の剣の使い手であるという、並々ならぬ武人としての誇りと、武器の使用を采配する「権限」もまた自分の掌中にあるのだという強い自負さえ感じとることができる。二つの引用の最初の方、「もし女を戦場に連れて行って情欲に溺れ自分が務めを怠ったりしたら、大事な兜を鍋釜(“skillet”) 替わりにしてもいい」という台詞について言えば、少し所帯じみた卑近なイメージの中に、自信の大きさを背景にした、少し調子に乗っているオセローがいる。だが、終局を迎えたとき、この台詞でオセローが十把一絡げにしてその存在を軽んじた“housewives”の一人、エミリアによって、オセローがこの世でもっとも重んじた価値を持っていたはずの「剣」の力が無であることを、逆に断じられることになるのである。

(EMILIA)

— I care not for thy sword, I'll make thee
known
Though I lost twenty lives. Help, help, ho, help!
The Moor hath killed my mistress! Murder,
murder!

(5.2.161-63、下線は筆者による)

人間がなまくらなお前の剣など何が恐ろしかろう
—女性たちは、愛すべき者について迷いが
ない一途な者たちであったが、自身が「この世で最もやさしい無垢な魂」(“the sweetest innocent that e'er

did lift up eye,” 5.2.197-98) と呼ぶ、愛するデズデモーナを失ったエミリアにとって、最早恐ろしいものは何もない。

7. “taint”という語が示すもの

ここで筆者が注目したいのは、上述132ページから133ページに引用した1幕3場269-75行のオセローの台詞および、131ページ4幕2場154-63行のデズデモーナの台詞の、“taint”という語である(該当箇所の下線部)。

シェイクスピアで、この‘taint’は、例えば『ハムレット』にある次のような台詞に出てくる。

(GHOST) . . .

Oh, horrible, oh, horrible, most horrible!
If thou hast nature in thee, bear it not,
Let not the royal bed of Denmark be
A couch for luxury and damnèd incest.
But howsoever thou pursues this act
Taint not thy mind, nor let thy soul contrive
Against thy mother aught; leave her to heaven
And to those thorns that in her bosom lodge
To prick and sting her.

(*Hamlet*, 1.5.80-88、下線は筆者による)⁸⁾

先王の亡霊が出て来て、自分が毒殺された様子をハムレットに告げて復讐を命じるところであるが、復讐の務めを果たすに際し、自分の心を‘taint’するな、汚すな、と命じる。復讐にあたって、ハムレットは心の気高さを失ってはならないのである⁹⁾。‘taint’という語は、精神的・倫理的なものの墮落や罪を暗示する隠喩的な言葉である。そのことはもちろんシェイクスピアにおいても例外でなく、いくつかの台詞を見てみればわかるが、シェイクスピアにおいて‘taint’されるものは、心であったり、操であったり、賢明さであったり、血統であったり、そのような精神的な抽象的なもので、「罪」とか「墮落」という「染み」がつきそうなものについて用いられていることが多い。そういう言葉を、オセローはどういうものに用いているか。先に挙げた1幕3場の引用におい

て、オセローにとって“taint”されてはならないものというのは、主人公いわく自分の「仕事」“business”である。

一方、上で後述するとして触れた、デズデモーナの台詞(4.2.154-63)の最後に、この語は用いられている。すなわちデズデモーナにとって汚してはならないものは“love”(4.2.163)である。芝居『オセロー』の中には、“taint”は、上述のオセロー1幕3場の台詞と、デズデモーナの4幕2場の二箇所にか、出て来ない¹⁰⁾。

オセローが、精神的・抽象的な価値を持ったものと共起することが多い‘taint’を‘business’と共に使うということは、‘business’がオセローにとっては、どのような意味を持つかということを示すものである。つまり、例えばデズデモーナが‘love’に対して取るのと同様の態度を、オセローが‘business’に対して持っているということである。最初に述べたように、オセローがヴェニス共和国という白人キリスト教社会でその存在を認められるためには「評価」が致命的に重要な要素なのだが、“business”を軽んじることが仮初めにもあるならば、「評価」“estimation”(先の引用1.3.275、これは“reputation”のまた別の言葉である)を下げてもらって構わないと見得を切って、オセローは言い切る。つまり、この台詞を語るオセローは、この世で最も価値のあるものを引き合いに出した最上級の表現で“business”の大切さを強調してみせたのである。オセローもデズデモーナもお互いを愛しているという。しかし、もしオセローが自分で言うとおりにデズデモーナを「命の泉」(4.2.55-8)と呼ぶならば、すなわちそう呼ぶ真情を世の中で最も尊ぶべきものとして愛の名を与えて言いたいとするならば、主人公は自分が愛と呼び大事にしたいものとは違う次元の別のものに心を囚われている実態には気づかず、いわば「勘違い」しているとしか言いようがなく、ちょうどリアと同じように、本物の愛を失うまでその実態がわからない。オセローには、自分では持っていると言断するデズデモーナへの愛情に釣り合うだけの、愛と呼ぶに値する信頼が無い。「勘違い」は、信頼が無いことから察せられるのである。評価に囚われる

オセロー(イアーゴーやキャシオーと同様に)は、自分にヴェニス社会での存在意義を与えてくれた「評価」ほど「愛」を信じていないと見えて、愛すると称する者を信じることができない——命の泉であると知る者を。主人公は勘違いから生じた間隙を、「評価」を得られなかったjealousyの毒に深く侵されたイアーゴーに鋭く突かれ、その毒が主人公をも侵してしまうであろう。シェイクスピアは、そのような精神的盲目の有様を、『オセロー』という芝居の鏡で映して見せているのである。

8. 結び

以上見たように、いくつかの台詞を取り上げながら、中心一周縁、軍人たちの闘ぎ合いと評価と権限の力学、女たちの一途さなど、『オセロー』におけるヴェニス社会の様相について検討しながら、最終的に作品中に二箇所ある“taint”に注目し、その語を含む台詞が、『オセロー』という劇世界をどのように収斂し得ているかについての考察を加え、その二つの台詞に、オセローとデズデモーナが大事にしているものの実態が見て取れる様を見た。主人公たちにとって大事なものとはお互いに互いへの「愛」であったはずのものが、実は最初から齟齬をきたしていることが見て取れた。オセローの心に、嫉妬とデズデモーナへの信頼の揺らぎとが生じ、最終的に悲劇へと向かうその起点になる3幕3場において、キャシオーの復職をオセローに懇願し一旦引き上げるデズデモーナの後姿を見て、オセローは「お前を愛していないのならば、今のこの世は壊れてご破算」(And when I love thee not / Chaos is come again. (3.3.91-92))と云う。そして劇はその言葉通りのironicalな終局を迎える。

最初は目に見えぬほどの亀裂だが、可能性として深淵ともいうべき裂け目——場合に拠ってはこの世の終焉と思えるもの——に発展していく、そのような破滅の温床を主人公は持っている。そのことは、劇の始め1幕3場で、すでに示されるのである。

【注】

※小論は、平成26年広島シェイクスピアと現代作家

の会夏季研究会での研究発表(平成26年9月6日)の一部に基づいて、加筆・修正を施したものである。

- 1) 1幕3場262行と4幕4場163行。後者を含む4幕4場153-166行は、1622年の第一四つ折版では欠落し、次年の第一二つ折り版で出て来る(注10参照)。
- 2) 小論では、小田島雄志訳、松岡和子訳、大場建治訳の『オセロー』を参照させて戴いたが、訳語をそのまま利用した場合、訳者名を()に入れて文中に引用文とともに示した。その他の日本語訳あるいは解釈は筆者のものである。
- 3) 小論における*Othello*の引用は、すべてEd. E. A. J. Honigmann, *Othello* The Arden Shakespeare (Thomas Nelson and Sons Ltd, 1997) に拠った。引用箇所の幕・場・行数は、テキストの示し方に従い、引用文の下または文中に()に入れて示した。また、引用文中の下線はすべて筆者によるものである。
- 4) 大場建治対訳・注解『オセロー』研究社シェイクスピア選集10(研究社2008)、1.3.75-76注。
- 5) 戦さについては、ヴェニス社会の中心の人々はもちろん、イアーゴーさえも「連中の手の内にやつほど能力のある手駒はないからな」(“Another of his fathom they have none,” 1.1.150)と、オセローの力量を認めている。
- 6) 例えば、2幕1場30行、43-44行などは、有能な軍人であることを伝える。また、5幕2場288行などは、かつて仕事ぶりだけでなく人間性も併せて評価されていた、ということ、終局において改めて示唆するような台詞である。
- 7) ‘honesty’について、*OED*に拠り、また小論の論旨に即して言えば、‘honour’(cf.*OED* ‘honour’の項1)とは「評価」「名声」であり、‘honesty’とは‘honour’すなわち論者の言う「評価」に値する心のありようである(cf. 同‘honesty’の項1b、3a)。シェイクスピアの少し前には‘honesty’と‘honour’がほぼ同じ意味で使われている時代があるが(同‘honesty’の項1c)、その時代を経てシェイクスピアの時代には‘honour’の実質としての‘honesty’が意識され、区別されるようになってい、あるいは名と実が乖離している現実が意識されている、とも言えるであろう。
- 8) Ed. Ann Thompson and Neil Taylor, *Hamlet* The Arden Shakespeare (Bloomsbury Publishing, 2013) に拠る。
- 9) Harold Jenkinsは、85行目の台詞について、二つ折り版の句読法を踏襲する「主流」の解釈に異議を唱え、“mind”の後のカンマを取り、nor以下と結合させて母ガートルードに言及するものと解釈すべきであると議論している(Ed. Harold Jenkins, *Hamlet* The Arden Shakespeare (Methuen, 1982), longer notes)。小論の筆者は、ここではその点についてまでは言及しておらず、あくまで動詞‘taint’と共に起しやすいイメージについて述べている。
- 10) 注1で示したように、デズデモーナの台詞は第一四つ折版(以下Q)には無く、第一二つ折り版(以下F)で現われる。篠崎実は、Qが、Fの不良本ではなく劇団の改定作業による初稿版Fの短縮版に基づくという近年の書誌学研究を踏まえ、『オセロー』における女性抑圧がその改定の方向性を示していることを、『オセロー』におけるイアーゴーの言葉の「呪縛」の力を論じながら詳細に検討している(篠崎 31-42)。この篠崎の論を踏まえて逆の方向から見れば、「初稿」を書いたシェイクスピア自身は、Qで削除されたとみなされている、小論の筆者が扱おうとしている上記デズデモーナの台詞をとおして、示すべきものがあると考えていたのだとも言えよう。すなわちイアーゴーの言葉に象徴される女性抑圧の動きとともに、あるいはそのような動きとは違う次元に、デズデモーナの言う“taint”されぬ「愛」がある、ということである。イアーゴーは劇中で「愛」とは情欲の「接ぎ穂」(“sect or scion” 1.3.333)にしかならないなど、肉欲的な側面のみを執拗に強調するが、イアーゴーの女嫌いの呪縛の力の及ばない所に真の「愛」があることも、『オセロー』という芝居の「鏡」には映っているように思われる。

引用・参考文献

- Honigmann, E. A. J., ed. *Othello* The Arden Shakespeare (Thomas Nelson and Sons Ltd, 1997).
- Jenkins, Harold, ed. *Hamlet* The Arden Shakespeare (Methuen, 1982).
- Klein, Joan Larsen, ed. *Daughters, Wives, and Widows: Writings by Men about Women and Marriage in England, 1500-1640* (University of Illinois Press, 1992).
- Thompson, Ann and Neil Taylor ed., *Hamlet* The Arden Shakespeare (Bloomsbury Publishing, 2013).
- Vaughan, Virginia Mason, *Othello: a Contextual History* (Cambridge UP, 1994).
- 大場建治対訳・注解『オセロー』研究社シェイクスピア選集10 (研究社 2008).
- 小田島雄志訳『シェイクスピア全集 オセロー』白水Uブックス (白水社 1983).
- 篠崎実「イアーゴの呪縛—『オセロー』における反復の詩学と女性抑圧」日本シェイクスピア協会編『シェイクスピアと演劇文化—日本シェイクスピア協会創立五〇周年記念論集』(研究社 2012), pp.25-42.
- 松岡和子訳『オセロー』ちくま文庫シェイクスピア全集13 (筑摩書房 2006).

(受稿 平成26年12月 8 日, 受理 平成26年12月15日)